彼の一本槍

狛犬

野営地に静かな歌が響いていた。松明と傷ついた兵士に囲まれ、声の限りに歌う少女がいる。少女の唇が詩を一節紡ぐたびに、苦悶に顔を歪めていた兵士が一人また一人と安らいでいき、戦意を取り戻していった。

「シルフィーヌ様、あまり多用されますと明日に響きます」

彼女の後ろで控えていた従者――ニコが口を開くと、シルフィーヌは小さく頷いて歌い終える。ニコが持っていた槍をひと振りして、各自に持ち場へ戻るように示すと、一同は将たる歌姫に頭を垂れ、感謝を示した後にその場を辞した。それを見送り、シルフィーヌも休息を取るためその場を後にする。

「ごめんなさい、ニコ」

将軍用にあつらえられた天幕に入り、二人きりになるとすぐにシルフィーヌはニコに向けて頭を下げた。浅葱色の長い髪がニコの前で揺れる。膝の前で揃えられた両手は細かく震えていた。

失意に震えるその様子は、味方から歌姫として慕われている将軍とも、敵方からセイレーンと恐れられている魔法使いにも見えない。ニコが幼い頃より親しんできたただの少女でしかなかった。

「何を謝ることがあるのですか」

ニコは急いで頭を上げさせ、彼女の手を握った。彼の体温が移るにつれて、徐々にシルフィーヌの手の震えは収まっていった。

「あなたをこんな戦争に巻き込んでしまった事を、私は謝らなくてはいけません。ただ私の従者だったばかりに、あなたは――」

「ですから、そんなことは考えなくてもよろしいのです」

今にも泣き出しそうに顔をゆがめたシルフィーヌが一気にまくし立てようとするのをニコは遮り、彼女を椅子に座らせた。そして持ち込まれた棚からカップを取り出し、紅茶をいれる準備を始める。

「僕はシルフィーヌ様に感謝こそすれ、謝られる事なんてありはしませんよ。それこそ、これから僕が死ぬ事になっても、です」

シルフィーヌのカップを用意してやりながら、ニコは努めて明るく振舞う。その後ろで、シルフィーヌがきゅっと自身の手を握り締めた。

「もし私に出会わなかったら、あなたはこんな所で戦わなくて済んだのかもしれない……」

「もしそうならばこうしてシルフィーヌ様にお茶を淹れる事も出来なかったでしょう。そもそも今まで生きていなかったかもしれない」

そして、あなたのために戦うこともできなかった。そう付け加えて、シルフィーヌに紅茶を差し出す。彼女は一言、礼を言ってから口をつけた。今のニコがあるのはシルフィーヌのおかげに他ならない。彼女への感謝を、彼は片時も忘れたことはなかった。

「孤児の僕を、町の片隅でねずみのように生きていた僕を拾ってくれたのはシルフィーヌ様です。だから、この命は絶対にあなたのために使う」

ニコはシルフィーヌの目を真っ直ぐに見据えて言い放った。その視線を受けて、彼女は俯いた。

「私はあなたをこんな事のために助けた訳じゃない。ただ普通の人と同じように生きていて欲しかっただけ」

「もちろん、それも分かっていますよ」

彼女の計らいでニコは貴族と同様の教育を受ける事ができた。勿論戦う術も覚えた。

彼女の優しさを邪推する貴族もいた。ただ自分の思い

通りに動く手駒が欲しかっただけではないのかと。しかしそうでないことはニコが誰よりも知っている。
彼女はただ守りたかっただけなのだ。ニコを含めた多くの弱き者を。そして、今そのために死のうとしている。
「力をもっただけの小娘なんて切り捨てても痛くないでしょう」
自嘲気味に呟いてシルフィーヌが投げ出すようにカップをソーサーに置く。カチャンという音と共に軽くカップにひびが入った。
ニコがこぶしを握りしめる。彼は主君の気持ちを手に取るように察することができて、だからこそ今回の采配に納得がいかなかった。
シルフィーヌのような少女がなぜこんな戦場にいるのか。それは彼女が類まれなる魔術の才能に恵まれていたから。魔歌と呼ばれるそれは魔術の中でも一番扱いの難しいもので、効力範囲共に優れている戦術魔法に分類される。先ほど兵士たちを癒すのにも用いたこの魔法、それは本来十数人で扱う筈なのだが彼女は一人でそれを成し得る天才だった。
その才能も努力しなければ光らない。彼女は日々を魔術の研鑽に費やし、幾つもの戦場に赴いた。その願いはただ一つだった。
だれかを助けてあげたいから。守りたいから。
シルフィーヌの目尻から宝石のような涙がにじむ。
「私一人じゃみんなを守れないわ。明日になったら私はみんなに死ねと言わなくてはいけないの。今までずっとみんなを守るために戦ってきた私がどうしてそんなこと言えるの？」
溢れ出した宝石は止まらない。ニコはそれを落とさないようにそっと手を差し伸べて拭った。
シルフィーヌが出された従者の手にしがみつく。ニコはやさしく、その華奢な体を抱きとめた。
シルフィーヌはニコの腰にすがり付いて泣いた。その体に腕を回してニコは優しく彼女の髪を撫でる。
「シルフィーヌ様が泣いているのを僕は初めて見ました」
「だって……私は貴方の主人なんだもの」
目を腫らしながらもシルフィーヌが恨めしそうにニコを見上げる。愛おしさに耐え切れなくなり、彼は強くシルフィーヌの体を抱いた。
彼女はニコの前でどれだけ虚勢を張ってきたのだろうか。ニコにはもうそれを知る由も無い。それを聞くだけの時間ももう無かった。
「最後に、良いものが見られて良かったかもしれません」
「最後なんていわないで……ニコ……」
彼女から体を離して、ニコは正面からシルフィーヌの目を見る。彼女の顔に戸惑いが浮かんだ。
「シルフィーヌ様、大丈夫です。あなたは他の皆に何も言う必要はありません」
「えっ？」
一体どういうことか問い返そうとした瞬間、彼女の足元がふらついた。そのまま床に倒れ伏す。気が付いたときには平衡感覚すら失われていた。
「これは……？」
「申し訳ありません、眠り薬です」
もはや呂律も回らない彼女をニコが抱える。そっと、壊れ物を扱うように抱き上げた彼の表情は悲痛に歪んでいた。どうして、と問うも彼女の言葉は届かない。幼い頃よりずっと親しんできた従者から受けた背信。その衝撃とは裏腹に体に伝わる感触は柔らかい。少女は幼い頃夢見た状況そのままに、彼の腕の中で意識を絶った。
「おやすみ、シルフィ」
ニコが痛む心を抑えて笑う。それは従者としてのニコでなく、幼いころからシルフィーヌと共に過ごしてきた一人の男としての言葉だった。頽れた体をベッドまで運び、横たえる。その寝顔に罪悪感を覚えつつ、ニコは立てかけてあった自分の槍を手に取り、天幕を後にした。

†

気がつくと、夜が白み始めていた。いつの間にか眠っていたらしく、背中を預けた木の幹が温かい。
彼女に薬を盛り、意識を奪ってからはとんとん拍子に事が運んだ。眠った彼女を信頼できる人間に任せ、逃げるように指示する。シルフィーヌの意識を奪ったのは敵軍の毒薬という方便も持たせておいた。今頃、要のシルフィーヌの不在を知って部隊の兵士たちは我先に逃げ出している頃だろう。
「あとは逃げ切るまでの時間を稼ぐだけ」
言い聞かせるようにニコは口ずさむ。勝つ必要はない。簡単な事だ。シルフィーヌを裏切ることに比べたらなんでもない。
ニコはふと、手中にある槍に視線を向けた。
それはシルフィーヌから賜った緋色の槍だった。これで戦え、と一言いえば喜んで受け取ったものを、これで自分の身を守りなさいと言い訳のように渡されたことを今でもニコは覚えている。
まるで炎のように穂先から石突に至るまでが赤く染められた槍だ。訓練で使うような安物の直槍と形状は同じながらも、輝きが違う。特に穂の部分は一体どんな金属を使っているのかニコには分からなかった。しかし、魔

法に秀でた主が用意したことから、優れた魔法の品だろうと考えている。
そういえば、昔読んだおとぎ話の英雄も槍を持って戦っていたなとニコは思い出した。何度傷ついても、彼はその槍を杖に立ち上がる。槍は最後まで折れることなく、ついに英雄は悪しき竜から国を守り通す――。
どこで読んだ話だっただろうか、思い出すことが彼にはできなかった。けれども、不思議とその話に勇気付けられる。
ニコの槍を握る手に力がこもる。ニコは国を守る騎士ではない。龍を倒す英雄でもない。ただ一人の従者に過ぎない。
それでも。
「行こう」
静かにニコが立ち上がる。おとぎ話の英雄のように、流れるような所作で槍を振った。主の意気込みに応えるように風切り音が頼もしい。
彼は英雄でないから竜を倒すこともできないし、国を守ることもきっとできない。
しかし、英雄でなくても。一人の少女を命を懸けて守ろうと誓った。彼女のために全てを捧げようと思えた。
ありったけの勇気を胸に、ニコが走り出す。

敵軍は既に行軍を開始していた。ニコが潜んでいる森を迂回するように、草原を進んでいる。ニコは彼らとすれ違うように森の中を走っていた。
見つからないように隠れながら、ときに樹上を渡りながらニコは敵軍の後方を目指す。狙いは軍の急所である魔法使い達、あるいは指揮官だった。
ニコが樹上から遠くを見やる。草原は緑の海のように広がり、行進していく敵軍は海に潜む巨大な魚影のようだった。
ニコが目標を見つける。
歩兵と弓兵に囲まれた敵軍の後部中央。軍の標である大旗をニコはその目で認めるや否や、森から飛び出した。
完全に敵軍の横を突いた形。勝ち戦と侮っていたか、ろくに周囲に注意を払っていなかった部隊の側面に躍り出た。獣のような雄叫びをあげて真っ直ぐに突き進む。
「てっ、敵襲ッ！？」
上ずった声で叫んだ兵士の喉笛をニコが貫く。そのまま槍を払い、ニコを追い詰めんとする敵を近寄らせない。迫る集団に切り込み、先頭の男の肩を突く。その勢いのまま次を薙ぎ、後ろを取った兵士を振り向きざまに蹴り払う。倒れた男の鼻面を踏みつけて跳躍。兵士たちの囲いを飛び越えた。
どよめく大群を尻目にニコはさらに駆け、切り抜ける。そのまま慌てふためく騎兵に肉薄した。
突き出される槍を躱し、返す刃で騎手を突き落とす。迫る追っ手を振り向きざまになぎ払い、ニコは騎手と入れ替わりにその馬を奪い取った。
「ちょっと借りるぞ！」
一方的に叫んで馬の手綱を引き、馬首を抑える。槍を振り回して近寄ろうとする敵を足止めし、そのまま敵陣中央に首を向けて強く腹を蹴った。驚いた馬はニコの思惑通りに、歩兵をはね飛ばしながら速度をあげる。
「さあ走れ！　中央までだ！」
坂を転がり落ちるような速さで、ニコの乗った馬が真っ直ぐに中央へと突き進んでいく。まるで布に鋏を入れるように容易く、戸惑った兵士の波が裂けていった。
「弓だ！　弓をつかえ！」
「馬鹿野郎！　味方にあたる！」
「構うものか、囲んで射て！」
叫び声と共に左右に弓兵が展開する。正面にニコの行く手を遮らんと歩兵が立ち並ぶ。号令の元、一斉に船が帆を張るように弓が引き絞られた。
ニコがさらに強く馬の腹を蹴る。このまま敵の群れを駆け抜けるつもりだ。ニコが身を伏せながら歩兵に突撃するのと同時に、一斉に彼に向けて矢が降り注ぐ。
矢羽の雨あられを馬上のニコが駆け抜けていく。加速した馬に狙いが定まらず、矢が彼の走った軌跡を残すように突き立っていく。弓兵達が二の矢を番えるよりも先に、ニコは槍を振り、馬を蹴立てて囲いを切り抜けていた。
そのまま彼が認めた大旗のところまで一直線に馬とともに突き進む。蹴散らし、突き刺し、斬って捨て。何度も歩兵に囲まれてはそれらを吹き飛ばすように突破する。
しかし、ニコに追いすがる影があった。
「そこを動くな！」
剣を引っさげ、ニコを追う白い甲冑に身を包んだ騎士が一人。瞬く間にニコに迫ると、大喝と共に横合いから一閃した。ニコはかろうじてそれを受けてすれ違う。受けたニコの手に痺れが走る。すれ違った騎士が馬首を返してニコを猛追。
振り切ろうと走るニコ。並ぶ騎士。飛び交う剣戟。目標の大旗はすぐそこに迫っていた。
追い払うようにニコが槍を突き出す。躱しざまに槍の首を捕まえて、騎士がニコの槍を封じる。相手が間合いを詰めた。剣が唸る。

「離せっ！」
「がっ！？」
　ニコが怒声と共に男に頭突きを食らわせた。一発、二発と繰り出すたびにニコの額から血が飛び散る。騎士の男が体勢を崩し、馬から落ちる。彼の兜の下から覗く血走った目が笑っていた。ぐい、と手元が引き寄せられる。
「ぐあっ！」
　瞬間、ニコは騎士の男に馬から引き摺り下ろされていた。天と地が何度も入れ替わる。視界の端で二頭の馬が彼方に去っていくのが見えた。額の傷口から血が流れ出し、視界の半分が血に染まる。騎士の男が

　這いずるようにして逃げる魔術師。その背中が次々と貫かれていく。ニコが彼らの逃走を許さない。
　一人二人、と瞬く間に突き伏せていくその傍ら。全てが加速したような錯覚をニコは覚えていた。体が軽い。飛ぶように動く。死線を幾度も抜けた昂揚感が全身を巡る。
　それ故に、ニコはもう何人突き伏せたのかも覚えていなかった。そしてどれだけ自分が傷を負ったのかも。
　気が付くとニコは取り囲まれていた。何人もの魔法使いの死体と、恐れと怒りを同時に抱く敵兵に。
「死ねえっ！」
　復讐に燃える敵兵達の怒号が響き渡った。無限とも思える程の刃が一斉にニコに迫る。
　むせ返るほどの血の匂いが草原を支配した。青々とした草地がニコの血液で染まっていく。

　しかしニコは決して倒れなかった。幾本もの槍を身に受け、躱しながらも伸びてきた穂先に突き返し、手や肩を貫いて無力化させていく。
　正面から突き出された槍を脇に挟み、首を薙ぐ。脇腹に刺さった槍を引きずり、血反吐を吐きながらも囲みを破らんと前に進む。周囲から繰り出される刃をその一身に受けても、彼の背は手中の槍が如く真っ直ぐだった。ニコは戦意を失うことはなく、爛々とその瞳が輝く。
「化け物か。なんなんだこいつは」
　彼の眼光に怯えた敵兵が口々に囁きあう。ニコの体は何本も槍が刺さっている、彼はゆらゆらと揺れながらも決して膝をつかない。抉られた傷口から筋肉が動くのが見えるその様はあまりに凄惨だった。激痛を意志の力でねじ伏せて、彼はまた槍を振るう。
「そこをどけ」
　浮足立った兵を押し付けるような低い声が響いた。その声が聞こえるや否や、彼らは恐れたように声の主に道を譲る。
　兵士を割って出てきたのは黒色の甲冑に身を包んだ男だった。黙ってニコはその男に槍を向ける。目標の一つ、指揮官だとすぐに分かった。
　緋色の槍の穂先を向けられてもなお、その男は余裕の表情を崩さない。いつでもニコを殺せる、彼の槍は自分に届かない。状況から見てそれは明らかだった。
「貴様一人でこの損害か、信じられんな。名はなんという」
　剣を抜き放ちながら男は名を問う。ニコは足元に転がった死体を足蹴にしながらその男に応じてやった。
「ニコ」
「姓はないのか」
「そんなものはない」

　蹴り飛ばされた死体に指揮官の男は眉をひそめる。ニコに追いすがったあの騎士の男だった。
「歩兵十名、騎兵四名、魔法使い十二名に私の副官。貴様の出した損害だ。貴族でもないのに全く大したものだ」
　男がはるか遠くを見やる。自分たちが攻めようとしていた方角、シルフィーヌたちが逃げていくその先だ。
「貴様の奇襲を受けておよそ半刻。もはや追撃はままなるまい。貴様の目的は果たされた。喜ぶんだな、ニコ」
「まだだ」
「なに？」
　指揮官の目にはニコに対しての怒りが含まれていたが、武人としての賞賛も確かに存在した。それを受けてもなお、ニコは表情を和らげない。
　額を流れる血を拭う。クリアになるニコの視界。そしてまるで突き刺すような、真っ直ぐな眼差しでニコは指揮官の男を見据えた。
「まだ貴方を殺していない」
　ニコが槍を握る手に力を込めた。殺気を向けられた男の目がすっと刃のように細くなる。
「その体でまだ戦うか」
「戦うさ」
「勝てるとでも？」
「まさか」
　槍を構えたままニコは笑みさえ浮かべていた。司令官の男はそれを自暴自棄な人間の浮かべるものと断じかけたが、即座に否定した。ニコの目は燃えるように輝いる。そして浮かべられた不敵な笑み。不退転の決意を司令官はその眼差しから見て取った。
「何故だ、貴様は何故あきらめない？　貴様は役目を果たし、貴様の仲間たちの命を守った。これ以上何故まだ

戦う？　何を守ろうというのだ？　まさか生き延びられるとでも思っているのか？」
その問いに、ニコは胸を張って応じた。
「確かに僕はここで死ぬだろう。それでも、命よりも大事なものがある。傷一つ、染み一つつけずに守らなきゃいけないものがここにあるんだ」
「なんなのだ、それは……」
呻く指揮官の男に向けて、ニコはただ一言告げた。
「僕の一本槍（こころいき）さ」
そう告げたニコの笑みは先ほどまでの不敵な笑みとは違う。力強く、誇るようなもの。彼の生涯で会心の笑みであった。
その言葉をきっかけに、まるで扉が開くようにニコの脳裏を過去の記憶が流れていく。走馬灯。槍を手に龍から国を守る英雄の話。幼い主君の声が脳裏をよぎる。
ああ、そうだった。
あれは読み書きも出来なかったニコにシルフィーヌが与えてくれたもの。彼女が自らニコに読み聞かせてくれたもの。読み終えてから、彼女は照れたようにこの話が一番好きで、この英雄が一番好きだと言って。
そうだ。だからニコは、英雄になりたかったのだ。彼女だけを守り抜くような英雄に。
槍が唸っているような錯覚を覚える。手が震えている。全身を抑えきれない。龍に挑む彼もこうして体を震わせていたのだろう。
きっと同じだったのだ、あの英雄も。
死の恐怖に怯えながらも、それでも守るべきものを守るために。何度傷ついても、その槍と共に。その背は槍のように真っ直ぐに。
全てを捧げよう。身も心も命も全て。シルフィーヌを守るために。
ただニコが持つのは主から賜った緋色の槍のみ。主を守ると誓った、その一本槍のみ。彼はそれだけを携えて逝くのだ。
戦い続けたニコの中を今まで以上の高揚感が駆け巡る。まるで血管で繋がっているかのように、槍が自在に動く。かつて無い一体感のような物を彼は覚えていた。
雄叫びを上げる。槍を構える。そして真っ直ぐに踏み込む。愚直に、一直線に。彼の心意気に従って。緋色の槍が心血の籠った願いにこたえて一層強く輝いた。
左右から突き出された刃に抉られながらも足を踏み出し、屍を踏み越え、ただ目の前の敵へ。
血を撒き散らし、肉を削がれながらも突き進むニコを見て、指揮官の男が顔色を変えた。
迫る。ただひたすらに、真っ直ぐに。大地を揺るがすような裂帛の気合と共に、彼は槍を突き出した。

†

シルフィーヌは夢を見ていた。ニコと一緒に二人で紅茶を飲んでいる、とても幸せな夢だった。二人にとってそれは穏やかな時間で、シルフィーヌはまどろみに身を任せるように目を閉じた。
唐突にカップが置かれる。ニコが紅茶を飲み干して席を立った。
「シルフィーヌ様、僕はこれで失礼します」
「どうしたの？　ニコ」
目を開けたシルフィーヌは無邪気に首をかしげた。寂しそうな微笑をニコが浮かべる。そして、彼は何処からともなく緋色の槍を取り出した。彼女の記憶にもある、ニコに与えた槍だ。
「待ってニコ。どこへ行くの！」
シルフィーヌは不安を抑えきれずに椅子を蹴立てて彼を止めようとした。しかし、体は動かない。彼女を見て、ニコは優しく微笑んだ。きっと彼は心を引き裂くような思いで笑っている。それをシルフィーヌは察した。
そして、そんな笑みを浮かべさせているのは自分だと分かっているからこそ、ただすすり泣くだけであった。
「シルフィーヌ様、もう僕のことはお忘れください。ただ前に進んでください。僕には何もいらないのです。誉れも、愛も、何もかも」
僕には、ただこれだけあればいいですから。
そう言って彼は緋色の槍をかざした。その途端、まるで夜明けが訪れたような温かい光がニコに差した。
「今までありがとうございました。あなたに頂いた命を、こうしてあなたのために使うことができて、本当に良かった」
夢の中で徐々にニコの輪郭がぼやけていく。日差しがまるで彼を導くように、足元を照らしていた。ニコがシルフィーヌに歩み寄り、彼女の手を取る。
「最後に騙して、ごめんね。シルフィ」
そっとニコがシルフィーヌの手の甲に口付ける。そしてニコの体が無数の光の粒子になってほどけて、日差しの指す方へ溶けて消えていった。
夢から醒めたシルフィーヌはさめざめと泣き、兵士からの報告によって全てを知った。
最後まで槍を手放さない、一人の英雄の物語を。